



華麗なる図書館利用者のための

Cool Librar

クールリブラー

講座

カジのうら若き青春黙示録

文ノカジ

オチの弱い話をするときって、

耳の裏がわりとスースーするのな

大見得を切ってみたものの、思いのほか小さくまとまってしまい後に引けなくなる。そういう経験は誰にでもあるだろう。そんな時、自分を責め、否定してはならない。そして他人がそうだった時も、決してその人を責め、否定してはならない。それを否定すれば、それは自分自身をも否定することになるのだから。例えば、3部構成にしたあるストーリーの最終話がふわっふわのまま終わろうとしていても、何人もそれを責めることはできない。我々人類が目指す終着点はそんなちっぽけなところではなく、もっと崇高な場所にあるのだ。

ご意見ご感想メールかなりの勢いで募集!

前回メールでの意見を募集したところ、深夜の田舎のコンビニのような盛況っぷり。なので、今回再び募集してみるよ。メールタイトルは「クールリブラーを毎号読んでいたら、テストで100点取れました!」でお願いしたいところだ。アドレスはこちら → coollibrar@hotmail.co.jp

手術しなくても全然よかったよ。

本当にお腹痛かった?」

まあ、そりゃそっただよな。ぶっちゃけお腹痛くなかったもんなあ。苦笑いでその場をやり過ごすカジ少年だったが、そこに後悔の念は微塵もない。このエピソードを「ネタ」として語る日が来ることを、小学3年の彼は既に予見していたのだ。

【前回までのあらすじ】

ポンキッキ観たさに学校を休んだカジ少年だったが、あれよあれよという間に手術台の上に、「エビ」を合言葉に麻酔を打たれ、緊張の中いよいよ手術本番!

麻酔後しばらくすると、下半身の感覚がなくなっていく。正確には感覚がなくなっただのかも分からないような感覚である。そして「じゃあ始めるからね」というゆるめの開始宣言の後、いよいよお腹にメスが入った。痛くない!痛くないどころか、お腹の中を触られて何やらくすぐったいのだ。それがわかった途端、手術前のあの緊張が嘘のように、リラククスした気分になっていた。

白い布で目隠しはされているものの、頭はすぐぶる湧えていて、今自分が置かれている状況を客観的に考えていた。横たわる無防備な小学生相手にいい大人たちが群がり、真剣な面持ちでお腹に器具をゴリゴリ押し当てている。もしこれが手術でなければともシユールな光景だ。

手術は滞りなく終了、病室のベッドに戻されまったりしていると、執刀医がピーカー片手に現れた。「見てごらん、すごくきれいなピンクでしょ!」ピーカーには手術で取り出した内臓らしきものが入っており、彼は不敵な笑みを浮かべながら続ける「こんなにきれいな状態なら、

